

2019 年 2 月 10 日

平成 30 年度 須磨区歴史講演会 「鈴木商店と須磨」

鈴木商店記念館 小宮 由次

1. 鈴木商店について

◇ “幻の総合商社” 鈴木商店とは



開港間もない明治 7(1874)年、鈴木岩治郎が神戸・弁天浜で創業した砂糖商(洋糖引取商)・鈴木商店は、岩治郎の死後、未亡人よねの下で番頭の金子直吉の手腕によって極めて短期間に世界的な大商社に急成長したが、昭和 2(1927)年の金融恐慌によってあえなく破綻した。金子直吉の旺盛な事業欲は、“国益志向”に基づき「生産こそ最も尊い経済活動」とする信念に裏付けられたもの。

◇ 金子直吉語録

○わしは質屋大学出身だ



傍士質店時代、質草の本を片っ端から読み、なんでもござれの総合大学出身だ。中でも熟読したのが有名な「孫子の兵法」を始めとする七つの兵法書「^{ぶけいしちしよ}武経七書」だったと云う。

○常に身を十字街頭に置け



事業と商売は、常に十字街頭に立っているものと心得て断行すべし。事を成すには常に前後左右に注意して処理すべし。

◇鈴木商店の沿革

創業からわずか 50 年余で超新星の如く姿を消した幻の総合商社・鈴木商店の沿革をライバル三井物産、三菱合資と対比して見直してみたい。

明治・大正期の鈴木商店と財閥系商社							
	 鈴木商店			 三井物産		 三菱合資	
	沿革	取扱高(百万円)	備考	沿革	取扱高(百万円)	沿革	取扱高(百万円)
明治7(1874)年	弁天浜にて創業			物産の前身「先収会社」設立			
明治9(1876)年				先収会社解散、三井物産設立(社員18名)			
明治19(1886)年			金子直吉入店				
明治26(1893)年				合名会社に改組、三井物産合名会社(資本金100万円)		三菱社を改組、三菱合資会社	
明治27(1894)年			岩治郎病没				
明治30(1897)年	資本金10万円				53.7		
明治35(1902)年	合名会社に改組、資本金50万円				85.5		
明治41(1908)年					242.8	独立採算制導入	
明治42(1909)年				株式会社に改組、三井物産株式会社(資本金2,000万円)	223.7		
大正4(1915)年	「天下三分の重宝書」						
大正5(1916)年					721.8	事業部制を進め、事業毎の分社化。	
大正6(1917)年	売上高日本一	1,540			1,095	三菱造船(1917)	-
大正7(1918)年			本店焼打ちさる	資本金1億円(払込7,000万円)	1,602	三菱商事(1918、資本金1,500万円)、三菱鉱業(1918)	
大正8(1919)年		1,600			2,130	三菱銀行(1919)	
大正9(1920)年	資本金5,000万円に増資				1,921		89.5
大正10(1921)年					814	(三菱商事)	118.5
大正11(1922)年					865.2		202.3
大正12(1923)年	鈴木合名会社(資本金5,000万円)、株式会社鈴木商店(資本金8,000万円)				882.9		250
昭和2(1927)年	鈴木商店破綻(営業停止4/2)						
* 三井物産、三菱商事の資料は、梶井義雄著「三井物産会社の経営史的研究」による。							

◇鈴木商店記念館について



鈴木商店の歴史的な価値を再評価し、その偉業を後世に伝えるために鈴木商店の有形・無形資料、データ等の遺産を維持・管理し、謂わば「神戸市記憶遺産」となるべくインターネット上に開設したのが「鈴木商店記念館」です。

- * 平成 26(2014)年 4 月 1 日開設。平成 31(2019)年 4 月に 5 年目を迎えます。
- * 歴史、地域、企業、人物各カテゴリ一別
- に鈴木商店を顕彰
- * 協賛企業 36 社
- * 平成 31(2019)2 月 1 日現在アクセス数約 85 万名

2.明治末から大正期にかけての須磨の別荘地

◇須磨の別荘群と大正の財界人



(須磨歴史倶楽部パンフレット)

風光明媚で、温暖な須磨の地は、明治以降、武庫離宮（現在の須磨離宮公園）が造営されると明治期から大正にかけて、別荘地として栄えました。

多くの財界人や華族たちがこの地を愛し、移り住み、日本一の商社であった鈴木商店の鈴木よねや、岡崎財閥の創始者・岡崎藤吉、川崎造船所を創設した川崎正蔵らの邸宅のほか、多くの高級別荘が建ち並んでいました。

須磨にゆかりの財界人のうち鈴木商店と関わりのある人々との繋がりを見てみる。

(1)松方幸次郎と金子直吉 ～「松方・金子物語」～



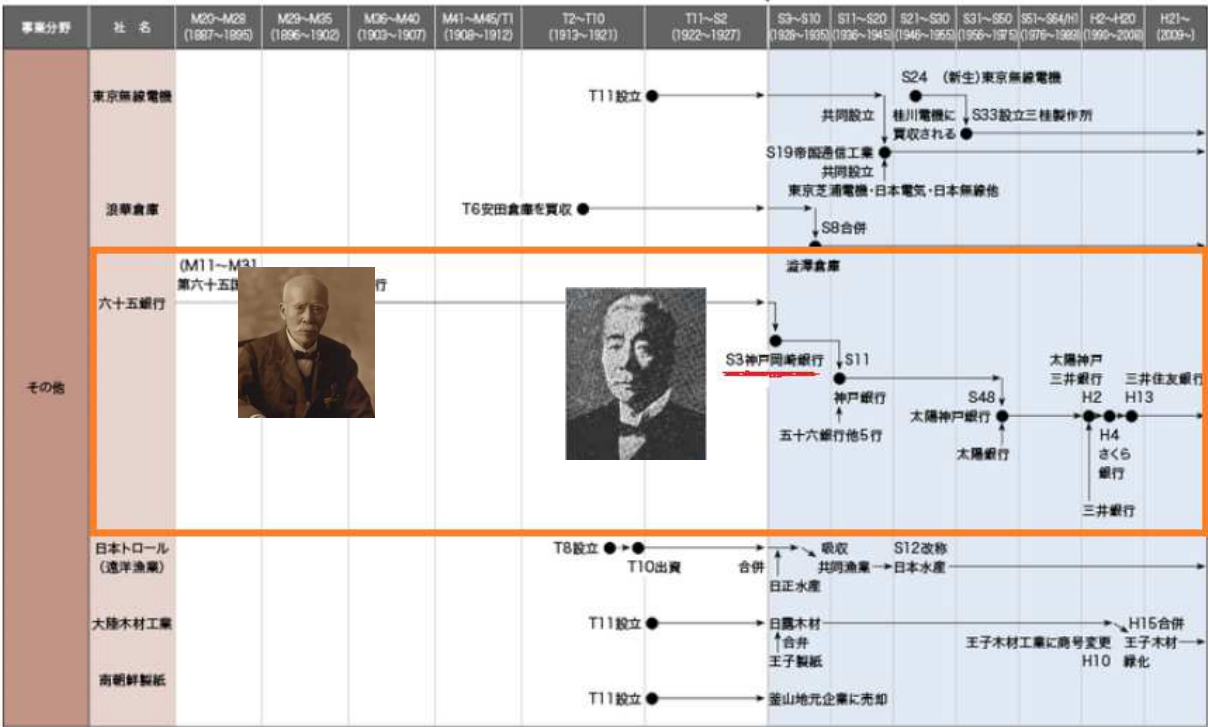
松方幸次郎（慶応元(1866)年～昭和 25(1950)年）と金子直吉（慶応 2(1866)年～昭和 19(1944)年）は、ほぼ同時代を生きた神戸財界を代表する実業家。松方と金子はともに神戸を本拠として国家的事業を推進した実業家として共通点が多く、互いに意気投合するところあり、永く友人として親交、ビジネス面でも私的でも協力し合った。

松方のロンドン滞在中にイギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパで西洋絵画・彫刻、日本の浮世絵を買い集めたいいわゆる「松方コレクション」についても金子は、松方に便宜を図り、収集資金の立替えも協力した。

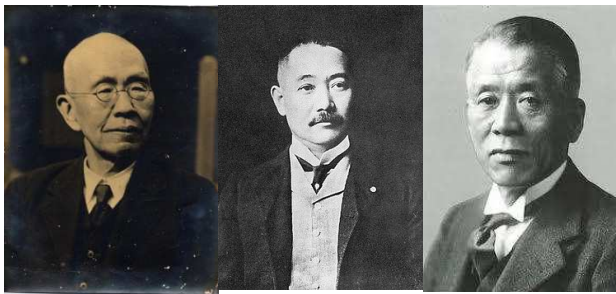
「松方・金子物語」（昭和 35 年 藤本光城著 兵庫新聞社発行）の刊行に際して、高畑誠一（当時、日商（株）会長）は、「当時松方さんの求めにより、日本に逆為替を組んで金融した金額は 60 万ポンド、現在（昭和 35 年当時）の金額で 60 億円にのぼる。松方さんの構想が如何に雄大であったかこの一事でも分かる」と。

(2)六十五銀行と神戸岡崎銀行 ～華麗なる一族に救われた鈴木商店の準機関銀行～

六十五銀行は、鈴木破綻後、昭和 3(1928)年神戸岡崎銀行に吸収された後、昭和 11(1936)年神戸岡崎銀行は、五十六銀行他 5 行と大合同して神戸銀行が誕生した。華麗なる一族の岡崎財閥に救済された六十五銀行は、新たな展開に組み込まれて行く。



(3)国策会社「国際汽船」を設立した金子、松方、山下～国際汽船から K ライン誕生～



国際汽船が本社を置いていた川崎造船本社（神戸・海岸通）

第一次世界大戦が終結すると船価は暴落し、造船各社はストックボート（見込み建造貨物船）の運用先として海運会社の設立を模索、大正 8(1919)年 7 月、松方幸次郎（川崎造船所）、金子直吉（鈴木商店）、山下亀三郎（浦賀船渠）、内田信也（横浜鉄工所）、浅野総一郎（浅野造船所）など発起人 9 社から船舶の提供を受けて**国際汽船**が設立され、松方幸次郎が社長に、金子直吉が会長に就任した。また、国際汽船は設立時に政府の出資を仰ぎ、国策会社として始動した。

(4)瀧川燐寸と帝国燐寸、東洋燐寸 ～“日本のマッチ王”と金子直吉の出会い～



瀧川辨三、婿養子瀧川儀作がそれぞれ経営するマッチ製造会社が合同するところとなり、大正 5(1916)年瀧川燐寸が設立された。同時期、鈴木商店も帝国燐寸を設立しマッチ業界に乗り出した。

大正 6(1917)年、帝国燐寸を一旦吸収した瀧川燐寸を母体に鈴木商店を大株主とする東洋燐寸が誕生することとなった。金子直吉と瀧川親子との信頼関係が新会社の誕生に繋がった。

3.須磨と鈴木商店ゆかりの地

(1)鈴木よね邸



お家さん・鈴木よねが鈴木商店絶頂期に神戸栄町通から移り住んだ須磨町（現在の神戸市須磨区若木町）の邸宅は、4,000坪ほどの広大な屋敷で、周囲には平安貴族・在原行平（業平の兄）が月を眺めたことから由来する月見山、武庫離宮（現在の須磨離宮公園）や小説「華麗なる一族」のモデルと云われる岡崎財閥の邸宅（現在の須磨離宮公園植物園）等が隣接する東須磨の高台に位置している。



鈴木よねの援助により大正6(1917)年わが国初の公立女子商業学校となる「神戸女子商業」が神戸・元町に誕生した。当時の女生徒達は、年一回須磨の鈴木邸に招待され、広大な屋敷で演芸や模擬店などで歓待されるのが常だったと伝えられている。

(2)金子直吉邸



金子直吉の住まいは、山陽電鉄本線「山陽須磨」駅から「須磨浦公園」駅に向かう中間地点のガードをくぐった直ぐ左手辺りにあったという。現在の須磨一の谷町2丁目に通じる急坂の登り口に位置した辺り。またこの住まいから脇の急坂を上った一の谷公園に隣接する場所には「一の谷山荘」とも呼ばれた別荘があった。

(3)大本山須磨寺



(4)桂尾山勝福寺

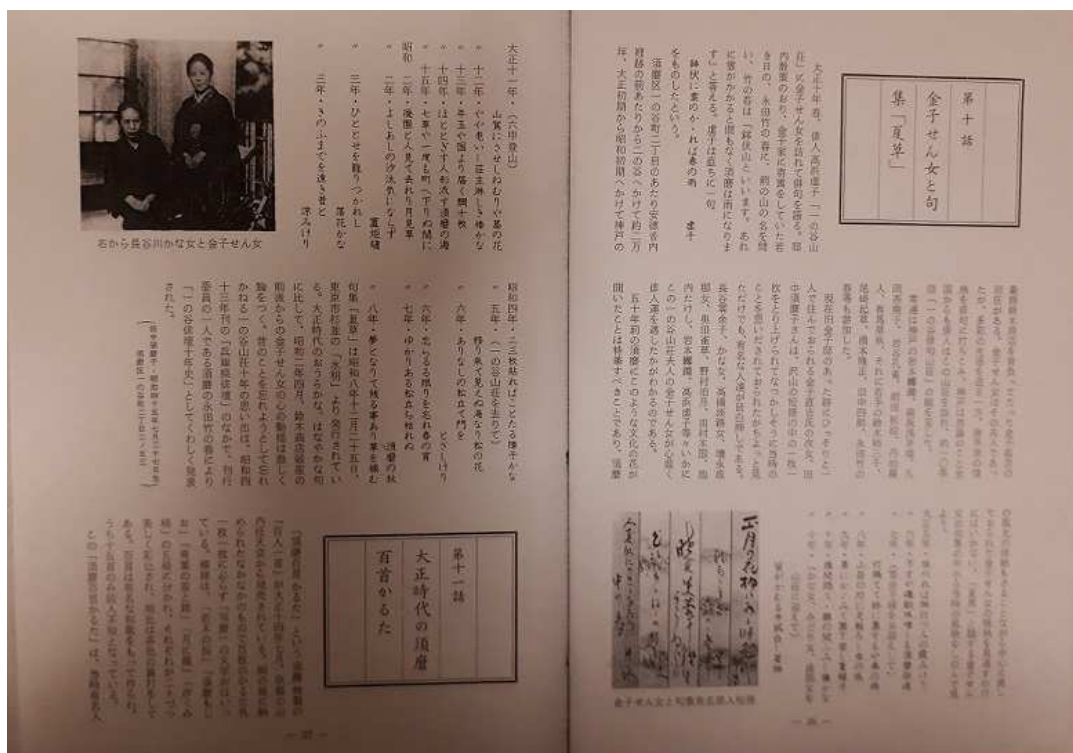


4.須磨・“一の谷俳句山荘”とホトトギス派 俳人たち (20 分)



大正初期、高浜虚子の働きかけによりホトトギス派に女流俳人の裾野を広げたことにより、ホトトギス編集員・長谷川零余子の妻・かな女、阿部みどり女、須磨の金子せん女（金子直吉妻）、越後の西脇茅花女などが初期女流メンバーとして加わったことが紹介されている。

(1)金子せん女



金子直吉の妻・徳子（本名：徳、明治 12(1879)年生）は、直吉が高知時代に奉公した主家（質商のち砂糖商）・傍士（ほうじ）久万次の三女。徳子夫人はホトトギス派の俳人で「せん女」と号し句集「なつくさ」を発刊した。（昭和 8(1933)年）ホトトギス派の代表・高浜虚子とも交遊があり、虚子は、大正 10(1921)年春、須磨一の谷の金子別荘「一の谷山荘」を訪れている。

(2)高浜虚子 鉢伏山を臨んで詠んだ一句



鉢
伏
に
雲
の
か
か
れ
ば
春
の
雨

虚
子

大正 10(1921)年春、高浜虚子が「一の谷山荘」に金子せん女を訪れ俳句を語っている。

(3)長谷川零余子、^{れいよし}かな女



長谷川零余子は、明治から昭和初期にかけて活躍した日本の俳人。群馬県出身。本名は長谷川諧三(旧姓富田)。東京大学薬学科専科を卒業。高浜虚子に師事し、「ホトトギス」の編集に従事。

妻は俳人の長谷川かな女。本名はカナ。長谷川かな女は、高浜虚子が女性俳人育成のために始めた婦人俳句会「婦人十句集」の幹事役を務める。大正期を代表する女流俳人となる。金子せん女とは格別親しくしてい

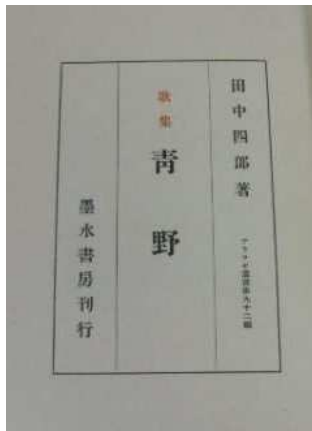
た。

(4)永田竹の春



俳誌「須磨千鳥」の第2代主宰で、句集「緑野」を著した俳人・永田竹の春は、若き日、結核を患い療養を余儀なくされた折、ホトトギス例会で知り合った金子せん女の勧めもあって須磨の金子邸で養生することとなり、大正8年8月から6年半にわたり須磨での生活を送ったと述懐している。

(5)田中四郎



田中は俳句のほか、歌人・土屋文明に師事し、アララギ派の歌人としても知られ、ペンネーム「青野 梓」名で多くの歌を残しており、歌集「青野」、「初夏集」などを著している。夫人は、金子直吉の次女・須磨子。

(6)大町桂月



高知県出身で、近代日本の詩人、歌人、随筆家、評論家。和漢混在の独特な美文の紀行文は広く読まれた。

須磨については、紀行文「須磨の一夜」を遺している。